

第92図 仙谷8号墓埋葬施設

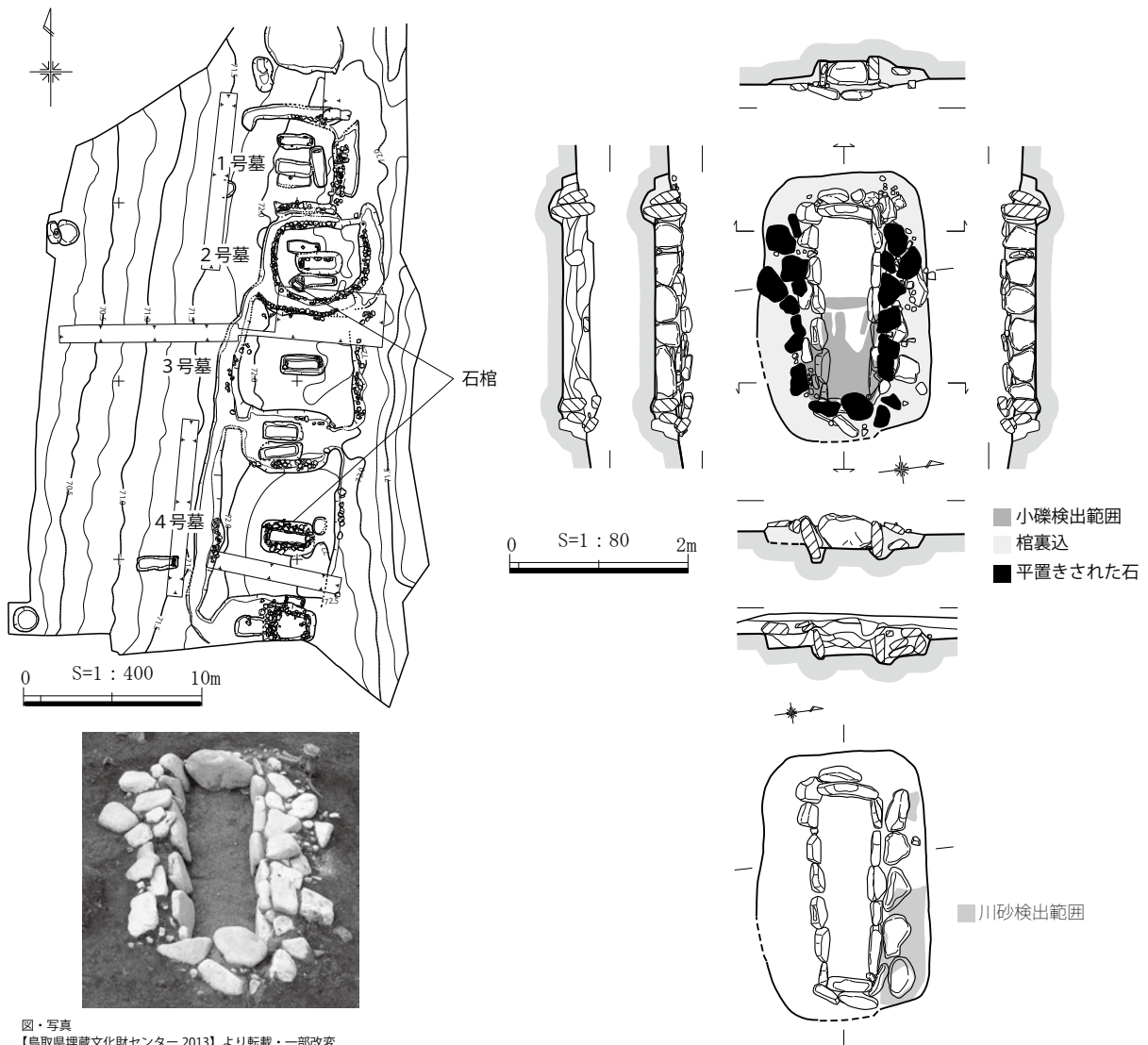
棺の内法は長軸 2.03 m、西側小口 58cm、東側小口 47cmを測る。石井垣例 2 には木蓋が想定される。足下側の棺内流入土の上層に 5～6 cm 大の亜円礫が多量に含まれていたことから、埋葬施設上での葬送儀礼に伴う礫の集積が想定されている。裏込めには主に土が用いられるが、北側の側石の背面には板状の石材が長手積み様に 2～3 段積まれている。北側側石の裏込めには灰白色の川砂も入れられており、棺の石材と共に白色を強調した外観上の演出の可能性が指摘されている（鳥取県埋蔵文化財センター 2013）。

石井垣例 1・2 の棺材は長軸 40～70cm、厚さ 20cm 未満の比較的板状を呈す石で、墳丘墓の眼下を流れる甲川で採取された河原石を主とする。石井垣例 2 では、側石及び東側小口石の外側に平置きされた石は左右対称に並べられており、頭位と推察される西側ではやや広い範囲に置かれている。頭位側を強調するように石材を並べる点で石井垣例 2 と 8 号墓は共通点が見いだせる。また、石井垣例 2 の平置きされた石の配置は、8 号墓の縁石と類似している。石井垣例 2 が木蓋の下に石が敷かれたと仮定すると設置順序は異なることになるが、装飾的に石棺を縁取るように石材を配置する作法が存在していた可能性がある。

8 号墓と石井垣例 2 の構築方法を比較すると、頭位に装飾的な意味合いをもつ石の配置が認められる点、棺を密閉する方法として粘土を用いない点では共通するが、8 号墓は大型の蓋石を用いるのに対して石井垣例 2 は木蓋である点、8 号墓は多量の石を丁寧に詰めて密閉するのに対して石井垣例 2 は棺材の隙間を埋めることもなく簡素な構造になっている点で異なる。石棺の構築方法は獲得できる石材の質や形状に影響を受けるために慎重に評価すべきだが、石井垣例 2 が眼下の河床で採集できるのに対して、8 号墓は大型の石を約 2 km 離れた限られた場所から運び込んでいる点は看過できない。墳丘の規模や副葬品などから明確な階層差は見えないものの、埋葬施設である石棺石材の選択や構築方法からは、8 号墓の被葬者が首長としての力を強めていることを窺い知ることができる。

大山北麓地域で弥生時代後期から古墳時代まで墓域の変遷を追うことができる集落は妻木晩田遺跡以外になく評価は難しいが、古墳時代につながる新しい墓制の要素は、妻木晩田遺跡のような地域の拠点となる集落の首長墓には終末期後半に導入され、古墳時代前期前葉には小規模な集落の墳丘墓まで波及していた可能性がある。^{註18} ただし、妻木晩田遺跡では、仙谷8号墓、妻木山14号墳で石棺が採用された後は古墳時代中期まで中心埋葬施設に木棺が用いられており、石棺が定着するには時間を要している。洞ノ原墳丘墓群以降、積極的に新しい要素を取り入れ段階的に構造を変化させてきた墳丘墓とは異なり、古墳には伝統的な埋葬方法が残り続ける。^{註19}

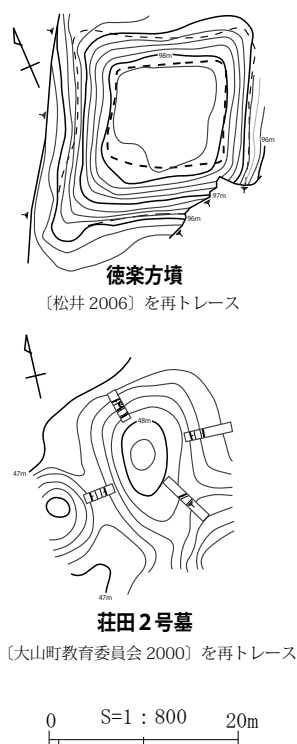
前節で触れたが、洞ノ原及び仙谷墳丘墓群に比べて、松尾頭墳丘墓は墓域の立地が異なっており、



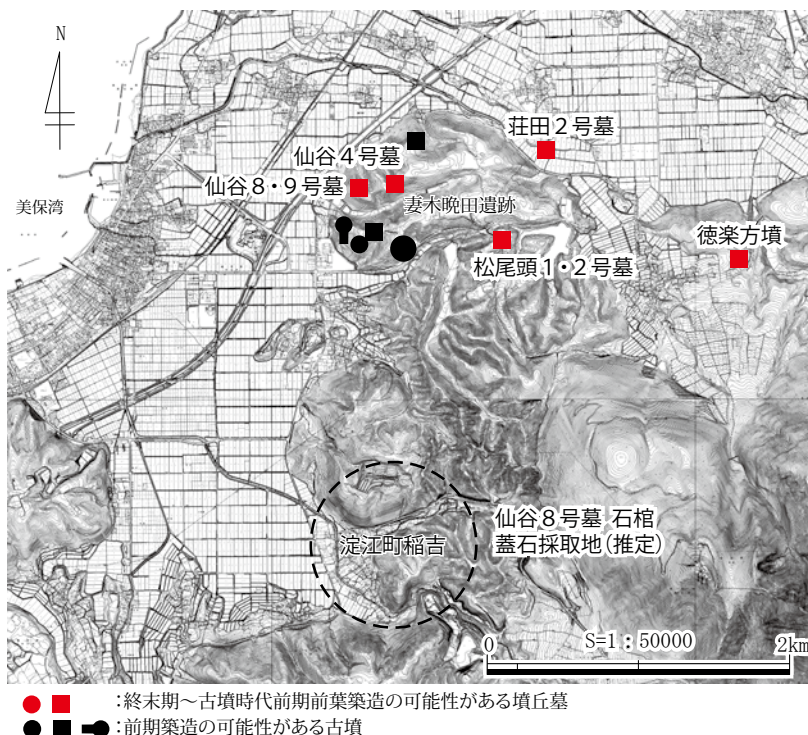
図・写真
【鳥取県埋蔵文化財センター 2013】より転載・一部改変

第 93 図 石井垣上河原 4 号墓 埋葬施設

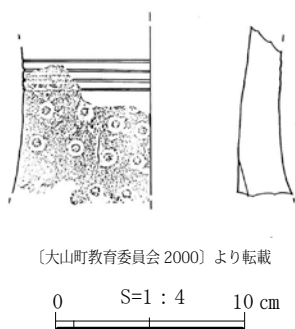
終末期後半の集落構造の変化が窺われる。ここで注目されるのは、妻木晩田遺跡周辺で起きた墳丘墓築造の動きである。「晩田山」丘陵西側には 2 基の墳丘墓が確認されている（第 94 図）。妻木晩田遺跡から 1 km 離れた微高地に築かれた徳楽方墳は、竹管文、半裁竹管文を施した特徴的な土器が墳頂部から大量に出土したことで知られ、四隅突出型墳丘墓の可能性が指摘される。また、「晩田山」丘陵下で妻木川右岸に築かれた墳丘墓に荘田 2 号墓がある。^{註 20} 徳楽方墳と荘田 2 号墓は単独での築造であり、基盤となる集落の位置や様相は明らかではないが、どちらも竹管文を施した土器が出土していることから関係性が窺われる（第 95 図）。徳楽方墳について築造時期の位置づけは難しいが、採取された土器からすれば終末期後半から古墳時代前期前葉の築造と推察され、松尾頭墳丘墓群又は仙谷 8・9 号墓に併行する墳丘墓と考えられる。^{註 21} ただし、平野部に築造された前期古墳は認められず、妻木晩田遺跡のみ墓域の造営が継続されている。このような墳丘墓の動向は、終末期における妻木晩田遺跡の集落規模の縮小と回復の背後で、墳丘墓を築造するような有力者層を擁する集団が分化し、丘陵から下りたことを示唆していると考えられる。その後、有力な集落に再編が起り、仙谷 8 号墓は、古



第 94 図 徳楽方墳・荘田 2 号墓



第 96 図 妻木晩田遺跡周辺の墳丘墓及び前期古墳の立地



第 95 図
荘田 2 号墓墳裾出土土器

墳時代前期前葉の妻木晩田遺跡及び平野部の集落を代表する首長墓として築造された可能性がある。仙谷 8 号墓の石棺が淀江平野側から石材を入手・運搬し、製作されていることから、丘陵東側の平野だけでなく、西側の平野の集落とも繋がりが想定される（第 96 図）。周囲に該当する集落跡が確認できておらず推測の域を出ないが、妻木晩田遺跡と平野部の集落を統率した人物が、仙谷 8 号墓に埋葬されているとみたい。

弥生集落が終焉を迎えた後、妻木晩田遺跡では洞ノ原地区西側丘陵を中心に前期古墳が築造され、洞ノ原墳丘墓群や仙谷墳丘墓群を回避しながら近接した位置に晩田山古墳群や妻木山古墳群が造営され続ける。このようなあり方からは弥生集落の墓域に対する忌避の意識が認められ、古墳群を造営した集団と弥生集落を営んだ集団には繋がりが感じられる。妻木晩田集落が丘陵上から姿を消した後に地域の拠点となった集落の位置は特定できていないが、丘陵上の墓域を視認できる範囲に存在しているのは間違いのないだろう。

おわりに

以上、妻木晩田遺跡の墳丘墓群について現時点での評価をまとめた。

妻木晩田遺跡の墳丘墓群の変遷を概観すると、集落最盛期にあたる後期後葉に複数の墳丘墓が存在し、突出した首長墓が確認できない点、終末期に仙谷 4 号墓から空白期において墓域が移動し、松尾頭 1・2 号墓が築造されるなど断続的である点からは、卓越した首長の存在を想定しにくい。しかし、集落終焉期にあたる古墳時代前期前葉では、最大の首長墓として仙谷 8 号墓が築造された点で画期が

見いだせる。仙谷8号墓が築造された背景を探るため、終末期から古墳時代前期前葉の集落の実態を明らかにする必要がある。

今回は集落の変遷と墳丘墓群の関わりについて言及することができていないが、終末期から古墳時代前期前葉の墳丘墓のあり方から、妻木晩田遺跡の集団の一部が分化し丘陵から下りた可能性を考えた。古墳時代前期前葉の集落では、弥生時代後期後葉に特別な施設を保有した松尾頭地区や住居の数が集中した妻木山地区のような中心となる居住域が見えず、現時点では首長の居住地がどこなのか判然としない。既に集落の中心が丘陵下に移動していたのであれば、仙谷8号墓の被葬者の居住地は妻木晩田遺跡の外に存在した可能性もある。周辺遺跡の動態を含めた検討を続け、集落が丘陵から下りた理由を探っていきたい。

平成25年度の第28次調査（内容確認調査）で松尾頭10区に新たな墳丘墓が確認され、墓域がさらに西側へ展開することが明らかになった（鳥取県教育委員会2013）。築造時期が終末期前半と推定される墳丘墓も認められ、松尾頭墳丘墓群の造営始期が遡る可能性がある。そこで、松尾頭墳丘墓群の時期と内容を明らかにするため、松尾頭10区を対象とした重点調査を実施する予定である。調査の課題としては、墳丘墓群の範囲と配置の確認、築造時期の確認、墳丘墓の墳形・規模・埋葬施設の数・被葬者に関わる情報の把握、墳丘墓周辺の埋葬施設の有無の確認など多岐にわたる。集落内の集団関係と墳丘墓群のあり方がどのように対応するものかは丁寧に検討していかなければならないが、松尾頭墳丘墓群の実態を明らかにすることで、終焉に向かう妻木晩田遺跡内部の変化を探るための手がかりを得ることが期待される。これらの調査課題の解決に挑み、第Ⅱ期重点調査の総括に向かいたい。

註1 これまでに妻木晩田遺跡で確認された墳丘墓36基のうち、埋葬施設内部の調査が行われたのは仙谷2・3・5・8号墓と松尾頭1・2号墓の6基のみであり、洞ノ原墳丘墓群では洞ノ原5・17号墓の2基で埋葬施設の平面プランを検出したに止め、内部の調査は行われていない。また、仙谷墳丘墓群の仙谷1・4・6・7号墓ではトレンチで墳丘の一部又は墳裾を検出した時点で調査を終えている。

註2 妻木晩田遺跡の環壕は、上縁幅約4m、深さ約1.2m、断面V字形の溝である。溝は直径約65mの範囲を囲っており、この範囲に建物はなく広場のような空間であったことが明らかになっている（鳥取県教育委員会2001）。環壕の掘削時期は不明だが、後期前葉という時間幅で洞ノ原墳丘墓群と環壕は共時関係にあると言える。後期前葉の洞ノ原地区は環壕と墓域の形成のために尾根頂部は広く伐開されていたものと推察でき、環壕の掘削や墳丘墓の築造にも大規模な土木作業が必要とされることから、洞ノ原墳丘墓群の被葬者は集落の礎を築き、このような作業を指揮した人物を想定したい。

註3 洞ノ原墳丘墓群では意識的に大（1・2号墓）・中（3・4・7・8号墓）・小（その他11基）に墳丘墓を造り分けていると考えられるが、ここで言う大・中・小型とは、同じ墳丘墓群内での評価であり、先行の研究（渡邊2002・2007など）で弥生時代の同一の形態をもつ墳丘墓を広範囲に比較して導き出された評価とは異なる。

註4 その後、洞ノ原地区は居住域となるが、墳丘墓群のある東側丘陵先端部に建物跡は認められず墳丘墓が壊されることはない。造営を終えた後も集落のなかで墓域として認識され続けていたと考えている。

註5 西伯耆地域では尾高浅山1号墓と並び最古相の四隅突出型墳丘墓が築かれた墳丘墓群であり、西伯耆地域の首長層の顕在化や山陰地方における墓制の伝播など重要な問題を提示する墳丘墓群と評価される。

註6 米子市教育委員会にご理解をいただき、第1次発掘調査の記録をご提供いただいた。記して感謝申し上げます。

註7 口縁部の拡張と平行沈線文の多条化が進み、ハケメ状工具や二枚貝による施文が確認できることから、帰属

時期は後期後葉の古段階（濱田 2009）と判断される。

註 8 墳丘墓周辺から出土する土器が居住域の土器と接合する貴重な事例である。同様な視点での再整理により類例の増加を期待したい。

註 9 後期に埋葬施設内に朱が確認された事例は西谷 3 号墓（出雲市）、布志名大谷Ⅲ 1 号墓（松江市）などの島根県東部域の墳丘墓や、宮内 1 号墓（鳥取県東伯郡湯梨浜町）などが挙げられる。

註 10 斜面下方側に溝は確認されていないが、盛土により墳頂と墳裾には高低差が造り出され、墳丘の範囲は明確である。

註 11 2 号墓に伴う可能性がある土器のうち、竹管文が施された体部破片と報告された破片は、観察の結果、壺の頸部と推定され、施されたスタンプ文は同心円文である（第 88 図）。筆者は以前、松尾頭 2 号墓と徳楽方墳、荘田 2 号墓との関わりについて、竹管文の土器が出土している点で共通性が見いだせるとしたが（鳥取県立むきばんだ史跡公園 2016）、本稿をもって訂正する。本稿掲載にあたり、再実測にご理解とご協力いただいた大山町教育委員会に感謝申し上げる。

註 12 円形の墳形や石棺の導入時期は一樣ではなく、小地域で検討すると差異があることが明らかにされている（大川 2010、陶澤 2012 など）。

註 13 やや飛躍するが、洞ノ原墳丘墓群が祭儀空間に隣接して営まれたのは、祭祀を行う場として墳丘墓が取り入れられたことを示す可能性がある。妻木晩田遺跡では「四隅突出形」を採用しつつも方形の墳丘墓も築造を続けており、墳丘の外観が他地域との関係性を示すものであったならば、「四隅突出形」は突出した首長墓というよりは葬送儀礼のパフォーマンスを重視して導入された（高田 2013）、という表現は洞ノ原墳丘墓群の評価を適切に示していると考えられる。

註 14 仙谷 1 号墓では墳頂部でも大型の土器片が表採されている。東側丘陵の墳丘墓の分析から、第 1 埋葬施設上に土器を供献する傾向が認められる。1 号墓でも土器の出土状況から埋葬施設の位置を絞り込むことができるかもしれない。

註 15 この時期の集落縮小の理由は明らかにできていないが、大山北西麓地域全体で遺跡が減少していることが指摘されている（濱田 2009）。

註 16 高尾浩司氏は、終末期段階の鍛冶工房の様相は不明であるものの、副葬された鉈は形態的特徴からすれば妻木晩田遺跡で製作された可能性があると指摘している（鳥取県教育委員会 2017）。

註 17 棺の形状について頭位側を広く足元側を狭く棺をつくる作法は弥生時代から続く伝統的な要素と考えられ、妻木晩田遺跡の木棺もその作法の下で造られている。（第 14・15 表参照）。

註 18 石井垣上河原の事例から山陰地方への石棺の採用から定着のあり方を検討した加藤裕一氏は、ほぼ画一的に木棺主体の墓制であった島根、鳥取、岡山県域に近似した時期に石棺の採用が増加、定着した背景は、古くから石棺を採用する地域からの影響のみでは説明が困難とし、「竪穴系埋葬施設」につながる新しい要素が広域に波及し、弥生時代から続く伝統的な墓制に影響を与えた可能性を想定している（加藤 2013）。

註 19 新しい墓制の定着が遅れたのは、仙谷 8 号墓の被葬者のような首長が生まれながら、広域のネットワークから弾き出されて力を失い、その後の集落の成長が阻まれたことを示している可能性がある。

註 20 荘田 2 号墓の築造時期は、周溝から出土した土器の特徴から後期後葉と考えられているが埋土上層からの出土にとどまり、墳裾からの出土は竹管文が施された土器片のみである。築造時期の判断は慎重に行いたい。

註 21 丘陵と下の平野部の集落が終末期にはどちらも墳丘墓を持ったと考えたが、どのような順序で築造されたのか現時点では明確にできていない。同一の集団が墓域の場所を変えて築造している可能性もあり、検討を続けたい。

主要参考文献

- 大川泰広 2012「第Ⅴ章 総括 第2節 本高14号墳の歴史的評価」『本高古墳群』鳥取県文化財調査報告書21、鳥取県教育委員会
- 岡野雅則 2005「妻木晩田遺跡の弥生時代墳墓についての一考察」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2004』鳥取県教育委員会
- 鏡野町教育委員会 1984『竹田墳墓群』竹田遺跡発掘調査報告第1集
- 加藤裕一 2013「第3章 石井垣上河原遺跡の調査 第5節 石井垣上河原遺跡の総括 2 墳丘墓群の評価」『石井垣上河原遺跡 赤坂頭無し遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書50、鳥取県埋蔵文化財センター
- 財団法人鳥取県教育文化財団 1996『宮内第1遺跡 宮内第4遺跡 宮内第5遺跡 宮内2・63～65号墳』鳥取県教育文化財団調査報告書48
- 山陰考古学研究集会 1997『第25回山陰考古学研究集会資料集 四隅突出型墳丘墓とその時代』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 2007『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』
- 島根県教育庁文化財課古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 2007『順庵原1号墓の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書37
- 鳥根大学法文学部考古学研究室 1992『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』
- 陶澤真梨子 2012「米子平野周辺における弥生時代後期から古墳時代中期の墳墓について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2011』鳥取県教育委員会
- 陶澤真梨子 2013「妻木晩田遺跡弥生墳丘墓諸要素の整理」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2012』鳥取県教育委員会
- 清家章 2002「折り曲げ鉄器の副葬とその意義」『待兼山論叢』第36号史学編、大阪大学大学院文学研究科
- 大山町教育委員会 2000『大山町内遺跡発掘調査報告書』大山町文化財調査報告書18集
- 高田健一 2006『妻木晩田遺跡』日本の遺跡16、同成社
- 高田健一 2013「山陰地方の弥生社会像」『吉備弥生社会の新実像・吉備弥生時代のマツリ・弥生墓が語る吉備』シンポジウム記録9、考古学研究会岡山例会委員会
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2013『石井垣上河原遺跡 赤坂頭無し遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書50
- 長尾かおり 2016「妻木晩田遺跡の盛衰と終焉」『妻木晩田遺跡国史跡指定15周年記念シンポジウム資料集 激動の3世紀を生きる 弥生時代の終焉と妻木晩田遺跡』鳥取県立むきばんだ史跡公園
- 長尾かおり編 2017「妻木晩田遺跡国史跡指定15周年記念シンポジウム 激動の3世紀を生きる 弥生時代の終焉と妻木晩田遺跡 パネルディスカッション記録集」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2016』
- 濱田竜彦 2002「洞ノ原墳墓群に関する一考察－洞ノ原1号墓・2号墓出土土器の再検討を中心に－」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2001』鳥取県教育委員会
- 濱田竜彦 2009「山陰地方の弥生集落像」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集
- 濱田竜彦 2016「事例報告 西伯耆地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会
- 松井潔 2006「弥生時代後期の地域社会」『調査研究紀要』1、鳥取県埋蔵文化財センター
- 松井潔 2007「西伯耆における大型器台の変遷と画期」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2006』鳥取県教育委員会
- 安来市教育委員会 1972『仲仙寺古墳群』
- 渡邊貞幸 2002「山陰の弥生王墓」『第5回加悦町文化財シンポジウム 弥生の王墓誕生－弥生社会の到達点－』加悦町教育委員会
- 渡邊貞幸 2007「第6章 まとめにかえて－四隅突出型墳丘墓概説－」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター